（爲福）また門番所には飛鳥井前大納言（雅典）四辻宰相中將（公賀）石山左兵衞督（基文）武者小路少將（公香）石井民部大輔（行知）正親町中將（公董）高野少將（保健）萩原右衞門佐（員種）竹屋左衞門佐（光昭）中御門皇后大輔（進か）（經明）藤島權尉（助胤）次に內侍所附には藤波三（二か）位（忠敬）倉橋大藏卿（泰聰）交野左京大輔（時萬）白川三位（資訓）六條少將（有義）綾小路少將（有良）町尻少將（量衡）次に御綱御用幷御乘として戶田備後守（忠綱）御用掛として羽倉肥前、松室河內、鴨脚和泉、祓川備中また御乘役御綱御用に目賀田丹後助、御乘役幷御取締は小堀數馬、諸御使番は馬場某、三宅某、藤本某、鈴木某、清水某、次に御下乘には中條某、中村某、蘆澤某、矢野某、木村某にて御醫には、福井豐後守、高階筑後守、次に御後女房附屬には杉山出雲守、伊良子織部正、山本玄番大允、藤木遠江介、平野大隅守、橫山主稅大允、伊藤圖書少允、また御前女房附屬には浦野東市正、松室大隅、松室豐後、松室丹後、吉田壹岐、富田阿波、小野山城、松室筑後、松室伊勢、鳥居南備後、吉見伊豆、藤島常陸、橋本常陸、松尾日向、東遠江、泉高越後、橋本薩摩、中津御紀伊、次に御茶御用は、松室甲斐、松室石見、岡本近江守、河端石馬權佐、藤本阿波守、速水內藏助、速水空大允、松波若狹介、世續陸奧介、山形左近將監、の諸氏なり、次に京都御留守居官は、議定右大臣鷹司輔熙、參與岩下佐治右衞門、權辨事宰相中將東園基敬、同宰相中將山本實政、同宇田栗園、同近衞中將、滋野井實在、同西本淸介、同新庄作右衞門、同世有恪太郎、錄事齊藤素軒、同白濱久太夫、同丸山兵衞次郎、同長岡治三郎、史官河北新甫、同山田筑後等なりといふ。

名家訪問錄

東京奠都事情

（伯爵大隈重信君の談）

東京遷都の事は、世人の皆な知るが如く、大久保利通の大阪遷都論に原因す、而して其事は大久保一人の發議の如く傳へらるゝも、實は當時既に新政府上下の間の殆ど一般の意見にて、唯だ何人をして之を發議せしめたらば、容易に行はるべきかと、其人を選擇し、終に大久保に說きて彼に建議を上らしめたるなり、當時余は、日本人が某英國人を殺害したる交涉事件の爲に、京都長崎等の間に往來して、遷都の議には與らざりしも、最早其頃は、餘程の保守家ならざれば、之に反對したる者無りしなり、何となれば從來は天子を以て人間以外の神聖なるものと爲し、實は敬して之を遠ざけ、朝廷を京都の一方に偏安し、全たく政事に關與せしめざる爲に、故さらに國民に近づくこと無らしめたるは、舊幕府の政策なるも、既に政權を朝廷に收め、万機の政令は朝廷より發し、殊に內には東征の軍を指揮し、外には列國の使臣にも接せんとするには、到底京都の如き狹隘の地にては能はざるのみならず、万機維新、以て天下の人心を新にし、朝廷は國政に關係なき神にあらずして、國民統治の政府なることを悟らしむるには、都を他に遷すの外なし、而して外交の事務は、海邊にして外國使臣の公館を設くるにも便利なる地を選むの必要ありて、偖は大阪と定められたるものにて、實に一千餘年來の帝都を他へ遷すといふことは、一人の建言などにて、直ちに決せらるべきにあらざるも、其頃の輿論は既に之に向ひ、唯だ大久保の名を借りて之を上りたるに過ぎざりし故、議は容易に決し、間もなく大阪へ行幸せらるゝに至りしなり、

大阪に行幸して本願寺別院を行在と爲したる間に、總ての行政機關を同地に移すの計畫にて、最ッ先に設けたるは造幣局なり、今日同地に造幣局の存在するは全たく大阪遷都の遺物なり、其頃新政府は、幕府の政權を收めたるも、政費を得べき財源は未だ幾ばくもなく、東征費用を首とし、万種の費用は得るに由なく、最も急務を感じたるは造幣局の事なりき、故に其頃英國政府が香港に設置せんと欲して失敗し、注文外れと爲りたる造幣機械ありしを、我國へ買ひ受け、直ちに大阪に据付けることゝ爲したれば、其後總ての役所は東京へ移したるも、一旦据付けたる造幣局のみは、今に至るまで大阪に殘るに至りしなり、

一旦大阪に遷すに決したる都にして、東京に遷すに至りしは、全國統一の必要より、前議を變じて此に至りたるものにて其間大事情あり、當初大久保建議の際は、戊辰の正月にて、上國の戰爭は僅かに平定したるも、關東は如何に成り行くか形勢未だ知る可らず、德川氏及佐幕黨の諸藩は、江戶に據り、函根を扼し、盛んに抵抗するも知る可らざる故、都を江戶に遷すなどは、未だ何人の念頭にも上らざりしも、德川氏は案外に恭順を表し、戰はずして江戶城を明渡したれば、征東大總督府は、江戶城に入り、また鎭將府を江戶に設け、關東東北半洲の政治は之に委任せられ、大總督府には、大總督有栖川宮の下に、西鄕隆盛大村益次郎等の參謀其下に屬し、鎭將府には輔相三條公之を統轄し、其狀全たく足利氏時代の關東の管領に異ならず、故に京都の政府と江戶の政府との間に統一を缺きしは勿論、江戶にても、大總督府と鎭將府との間に一致を缺き、殊に德川氏處分に對しては、甚だしき衝突ありたるなり、西鄕隆盛、海江田信義等の意見にては、抵抗せざる者は征するに及ばずと爲し、西鄕と勝伯との間

に、穩かに江戸城の授受を了りたるは、後世美談とする所なるも、江戸の市中取締は、德川氏の舊臣に一任し、上野に彰義隊が屯集して、市中に暴行しても、一切之を放棄したるは、大村等の大に不滿としたる所にて、殊に江藤新平の如きは、殆ど壯士の巨魁と云ふべく、斯かる有樣にては、江戸を取りても治むること能はずとて、自ら京都に上りて事情を陳し、終に彰義隊は擊攘するに至りしものにて、海江田の如きは京都へ呼戻されたり、

當時江戸の政治は、近頃臺灣の新領地に總督府を置きて政務を委托したると、其跡は略ぼ類するも、其規摸は遙かに大にして、全たく關東の半國を管轄する新政府を設けたるものにて、近ごろ臺灣にて見しが如く、武勳派文治派の軋轢の外に、其頃は同じ武勳派の中にも、意見區々なりしかば、其の混雜は名狀す可らず、此等の事情は追々京都にも聞へ、先づ木戸も來りて其實況を見、尋で大久保も來りて之を見、斯くては統一行はれ難し、何とか政令の一途に出る途を講ぜざる可らずとは、早くも其頃上下の間に考へられ、斯くて東北も平定に臨みたる故、一旦車駕東幸し、百官扈從し、江戸政府の有樣並びに內外の形勢を見、外國人の最も多く來り住する所も橫濱にして、新政府反對者も東北に在るが故に、偖は內治外交ともに、此所を都と爲すを便とし、殊に總督府鎭將府をも廢し、全國の政令を此所より發せば、統一の効を奏するに最も容易なるべきを以て、偖は一旦京都に還幸し給ひしも、來春再び東幸せらるべしと決し、太政官も江戸に移つし、諸侯も此所に會同することゝ定め、東京遷都の事は略ぼ其頃に端を發し、翌年三月東幸し給ふに及びて、終に永く此所を帝都として定め給ふに至りしなり、

奠都當時の東京

舊江戸諸侯邸宅の處分—桑茶植付—奠都始末—諸役人邸宅無賃貸與—千坪二十五圓の拂下—貧民救助—敎育所—警察改革—與力彌助の橫死—貯蓄金穀の處分

（伯爵大木喬任君の談）

四月十六日大木喬任伯を、鎌倉材木坐村の別墅に訪ふた。此日東京を出た時は、一天拭ふが如き天氣であつたが、濕車が鎌倉へ着く時分には、大雷雨で、天地晦冥、電光閃めき、豆大の雹さへ降つて來て、實に暗憺たる光景であつた。旅行者には最も失敗の天候に違ひないが、訪問者には實に好機會を與へるものである。此樣な日には、誰れしも相手を得て談話を試みたくなる、殊に病痾を養ふて居られる人の、閑談を聞くには、此の上もない好天氣になつて來た。

樣先から雨後の海を手に取るやうに見晴した坐敷へ通つた、屢しば障子へたゝきつける橫しぶきは、興に入る主客の談話を驚かして、一層の風情を添へた。余は先づ東京府初年の知事大木伯に、當時東京府民心を鎭撫する、最初の方針如何を問ふた、すると伯は徐ろに口を開いて箇樣語られた。『己が參與から東京府知事の兼任を命せられた當時、第一に處置に困つたのは、舊大名及幕府旗下の士の邸宅である、塀は頽れ、家は壞れて、寂寞たる有樣、是れが東京府の大部分を占めて居つたのである。で、己は此の荒れ屋敷へ桑茶を植へ付けて殖產興業の道を開かうと思つた、今から思ふと馬鹿な考へで、桑田變じて海となると云ふことはあるが、都會變じて桑田となると云ふのだから、確かに己の大失敗であつたに相違ない。併し己は外の者よりも、自分の失敗を早く悟つて、そして其過を改むるに憚らない男であつたから、此方策が過つて居るのを自覺すると同時に、ドーカして東京を帝都にしたいと云ふ考が起つた。當時京都の方にも遷都論が盛んに唱えられて居た時分で、己等は東京で以て此論を唱へた。

が、妙な事には、今でこそ東京は日本の中心で、天下に號令するものは、必らず此要地に賴らなければならぬ、だから帝都を江戸に移したのであると云ひ、又當時遷都の主唱者も、陽には此論を主張した、成程理屈の立つた御尤な話であるが、內々は他にも原因の存するとである。人情と云ふものは妙なもので、公卿衆は何んにせよ京都が墳墓の地であるし、殊に生活の方法から、總べて京都的であるから、遷都に反對したのは無理もない話、併し各藩の徵士の中でも、京都に長く居つた連中は、其土地の風景や、生活の慣習に知己になつて、何んとなく京都がなつかしく、其れ故遷都に反對するものもあつた。其れの反對で東京に來て居つた各藩の連中は、皆東京風に化せられてしまつて、何時までも東京に居りたいやうな心持になり、頻りに遷都論を唱道した。だから表面は成程天下の利害得喪を論じて、東京奠都の議を唱えたに違ひないが、內實は大に人情の異同が、關係して居つたものである。

其樣云ふ風で、隨分種々な議論も出たが、結局京都の人氣を東京へ向けなけりやならん、此れには何んな方法を講したら能からふか、之れが遷都論者の苦心であつた。で、先づ、東京へ京都人の人氣を向けるのには、暮し向の方から誘ふのが能いと云ふので、夫の岩倉公が、當時の會計官の有司島義勇に命じて、舊諸侯及幕府旗下の士の邸宅を修繕して、之を上下の有司に無代價で貸與へることにした。其れと云ふのも京都では、各藩の人士が、皆一軒幾許、一間幾許と云ふ家賃を出して、暮して居たのであるから、東京では堂々たる大邸宅が、無代で借りられると云ふもので、多少京都に居る有司の人氣を東京へ引ひた。併し其頽屋を修繕するには、數十万圓の費用がかゝつたと云ふことを、島義勇から聞ひた。是が明治二年二月から着手したとであつた。

また、其れから明治二年に愈々奠都になつて、諸役人が次第に東京へやつて來る、で、家屋の修繕はしたもの